

文學博士 島津久基 著

國文學の新考察

東京 至文堂

昭和十六年九月二十日 印刷
昭和十六年九月二十四日 發行

國文學の新考察
定價 金六圓



著者 島津久基

發行者 佐藤正叟

印刷者 高橋郁

發行所 東京市牛込區拂方町二十七番地 至文堂

振替口座東京二九五〇七番
日本出版文化協會會員番號一二〇七二

電話牛込 (四) 四四四五番

配給元 日本出版配給株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九

は し が き

寡作遅筆の自分にもこれまで發表した小論文が積り積つて幾らかの數に上つた。舊いものや特殊の誌上に掲載したものなどは簡單に閲讀出來ないから、まとめて一冊にしてほしいとの要望が知友の間に數年前からあつたのを、多忙とおつくうがりからそのまゝにしてゐたのであつたが、今回少閑を獲て整理してみた結果を、さきに明治書院から上梓した源氏物語に關する研究の分を除いて、こゝに集録刊行することになつた。

所收論文は大正十五年以降現在に到るものであるが、従つて中には今日から觀れば、かなり不滿なものもあるけれども、書き改めるとなれば、執筆當時の氣分と企圖と意義とを多分に消失することになるしするので、唯僅少の補正を施し、或は註記に追補の意味を添へるだけに止める方針にした。卷頭の一文の如き、その後の國語國文學界長足の進歩により、近松語彙や日本文學史表覽の出現をはじめ、他の方面に於ても無數の業績が示されて來た事實が當然訂正乃至抹消を要請してゐる部分があるけれども、それだけ最近十年の斯學の趨勢を物語る記念として、さうした部分は「見せ

消ち」といつた姿で却つて讀者を微笑せしめるに違ひないと思ふ。

右の意味にもおのづから觸れてゐると思ふが、新考察といつても、實はもう一昔前の意見もある。又自分では相當新しいつもりでも、識者の眼からは案外陳腐で又誤つてもゐると嘲笑されるのもあらう。唯それ／＼の意味でその時々試見として或は新に立てた論考として提示してみたい意欲から發表したものの集積であるといふ點では、すべてに一貫したものである。又一昔前の考へ方でも稚拙なりに不備なりに、その意圖する所の旨趣がなほ現在にあつても依然重視され冀求されねばならない必要さを主張してゐないとは斷ぜられ得ないものも皆無ではあるまい。書肆の望みにまかせて、題名を容認した所以である。

各章個々のさゝやかな論文であり極めて狹少な管見の記録であるが、みづからの力を揃らず強ひて體系の完きに整へることに逸つて、見えすいた間隙を自己を欺瞞して埋めつゝ、いかめしい外觀を取繕ふことの自責から救はれるだけ、氣安い心強さの歡びがある。而もさうした大きな完き體系の基礎構成の一片一材でありたい熱望と豫期とを懸けて、やがて日本が打樹てるであらう新しき國學、書くであらう大きな國文學史への不斷の零碎な寄與を捧げ續けたい私の念願である。

が徒らに雜然と並列するのでは一層意味をなさないから、假に本書では、讀者の爲にも、亦自分の整理の爲にも、大略四つの篇には類別してみた。そして四篇それぞれ或まとまりは出來てゐるやうに思ふ。又隨時の發表の集成である爲、各篇各章必ずしも同一の方式でなく、且時に内容の重複もないではないが、却つて互に説明補足し合つて、全體としての論述を精確にするに役立つてゐるやうな所もあるのは、望外の僥倖とすべきであらう。

昭和十六年八月

著 者 識

隨筆と物語

目次

「つれづれ」の意義……………	三
——國文學と註釋——	
兼好の健康……………	四七
兼好と元可……………	七一
枕草子と清少納言……………	七九
枕草子短觀……………	一〇八
——山の端いと近くなりたるに——	
平安朝文學の彈力……………	二五
古代・中世の「作り物語」……………	三四
昔物語と歌物語……………	四〇
竹取物語小論……………	五七

散佚物語三つ	一七三
--------	-----

一 初雪物語	一七三
--------	-----

二 とほぎみ	一七四
--------	-----

三 しらゝ物語(附、しじら)	一七六
----------------	-----

桂中納言物語	一八五
--------	-----

中世文學

義經記論	一九七
------	-----

第一章 義經記の性質(一)	一九七
---------------	-----

第二章 義經記の性質(二)	二〇七
---------------	-----

第三章 義經記と義經物語	二三二
--------------	-----

第四章 義經記の構成と史實	二三四
---------------	-----

第五章 義經記と義經傳説の成長	二四九
-----------------	-----

第六章 結語——義經記の延長	二五九
----------------	-----

小督と小原御幸……………二六五

——平語餘録——

御伽草子・假名草子・舞の本……………二七〇

御伽草子論考……………二九二

番外舞曲「相模川」……………三三二

幸若の曾我物……………三三五

ふりこほり……………三五〇

——狂言「朝比奈」から——

西鶴・馬琴

西鶴と古典文學……………三五九

——特に一代男と源氏物語との關係を中心として——

一 序 説……………三五九

二 兩作品の相似……………三六二

三 西鶴の古典知識と西鶴文の古典味……………三七七

傳説・説話

説話學の對象としての傳説

——傳説學序説——

一 語義

五二

四 一代男以外の作に於ける源氏の影響……………四〇四

五 西鶴文の止筆様式と源語……………四〇九

六 西鶴と翻案模擬……………四一七

七 源語の翻案としての一代男……………四二一

八 翻作源語の成果……………四六五

馬琴とロマン……………四八三

馬琴論片……………五〇八

一 逍遙鷗外と馬琴……………五〇八

二 芳流閣——馬琴の描法……………五二〇

三 俠客傳……………五二四

二	説話の分類	五三
三	傳説の變移性	五五
四	傳説の他種説話との交錯	五八
五	傳説の文學的進展凝成	五二
六	製作説話と傳説	五四
七	傳説の民族的特色	五六
八	傳説の分類	五四三
	天狗の内裏とイニード(アエネーイ)	五五一
	——牛若丸地獄極樂廻傳説とイニース(アエネーアース)傳説——	
	傳説と和歌	五八四
一	和歌及び連歌の起原傳説	五八四
二	歌物語(一)	五八六
三	歌物語(二)	五八八
四	萬葉集及び風土記の和歌傳説	五八九

五	神佛の詠歌傳説及び高僧傳説と美人傳説	五九一
六	武勇傳説と怪異譚	五九五
七	秀歌説話と歌人の綽名	五九六
八	歌徳傳説	五九八
九	和歌から生れた傳説	六〇三
一〇	鶯と蛙の歌	六〇六
一一	傳説を詠じた和歌(一)上古	六〇八
一二	傳説を詠じた和歌(二)中古近古	六二〇
一三	傳説を詠じた和歌(三)近世	六二三

隨
筆
と
物
語

「つれづれ」の意義

——國文學と註釋——

在來の國文學研究が久しく訓詁註釋に終始してゐたのは事實である。特に古典に對して漸くその解明の必要が感ぜられて來た平安時代の末頃から、唯因襲に引きずられ無意義な傳統熱に酔ひ來つた近古時代に至つては一層、幾多相繼いで試みられた古典の註釋は、徒に屋上屋の煩雜と冗漫と無意味さとに耐へ得られさへすれば、最後に出た一本をとればそれ以前の註釋の史的縮圖を極めて便利に概觀し得るほど、先人の考に對する盲目的な尊重の跡を残してゐるのである。而もなほそれは、眞の意味の訓詁註釋とは言へないものであつた。徳川の文藝復興期以後に於ける復古精神の活動に伴ふ眞摯な古典研究の第一歩として、訓詁註釋が始めて文獻學の一方面として所謂國學史の上に意義ある仕事を遂行したのであるといつてよい。

然るに、國學の成立といふ喜ぶべき現象は、又やがてこれが破壊を生命としてゐた保守的な傳統の芽をいつか自身の中にめぐましてしまつた。國學創設當初の先覺者達の意氣も抱負も不斷の努力も次第に見られなくなつて、徒に邪路に入つた小さな鎖國的、且、殆ど世襲的訓詁の世界にせぐまつてゐる一團の人々の手に、國文學が委ねられることになつた爲に、そして今ではもう殆どそれは影の薄いものになつてしまつてゐるにもかゝらず、その餘波は、なほ一部の人々に國文學研究を註釋といふ側に局限せしめて考へさせ、同時に他の方面に於て、漸く祖國の藝術に對する眞の理解と同情とが目醒めて來つゝあるとはいへ、なほやゝもすれば國文學そのものに對しての大膽な無鑑賞無批判的な侮蔑をまで惹起せんとするのである。

二

我々は世界中で日本だけが國文學を訓詁の學にいつまでも委ねて顧みないといふやうなかなり近い昔まで續いた奇現象、並にそれに對する非難に、今日では最早無條件に事實上の承認を與へる必要を感じない。併し十分に反省して、一層自らを責めたいと思ふ。それに、註釋などは現代の仕事でないといふ聲も聞く。全くさうだ、さうでなければならぬと言ひたい。しかもその爲に所謂訓詁註釋は果して完全に

なし盡くされてあるだらうか。

訓詁の學に國文學を委ねて顧みなかつたのは過去の事に屬する。併しながら藝術作品としての國文學に對して試みられた批評的研究もまだ數多くなく、新しい意味の文獻學、從つてそれに屬する諸種の分科の對象としても、國文學はなほ其の一部分しか取扱はれてゐないのである。そして此の不満足な狀況を餘儀なくせしめられる主な理由が、研究の成果に到達する準備並に手續の上に存するといふことが、いつも我々をして痛恨を禁じ得させないところである。對象たる作品を正しく理解し鑑賞し得るに必要にして十分なる資料の蒐集すらも、決して完全に試みられてあるとは言へないのである。本文批評の問題は如何。完全なる國文學作品年表は如何。又、語源辭書や、國文學の或作品に就いての特殊辭書、先人の研究に關する記錄の史的若しくは種目的集積並に類別などのやうな大切な作業が、未だに殆ど爲されてないと言つてもよい位である爲に、研究の緒をすらかみ出すに困惑し、或は暗中摸索的な材料蒐集の迷路に彷徨し満足であり完全であると信ずる理解に達し得ざる焦燥は、やがて逡巡となり、倦怠となり、自棄となるに至ることすらあるのは、常に經驗するところである。而して、更に從來國文學者の主要事業であつた註釋の方面に就